

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2

ミュージアムの収蔵品55

『寫眞通信』

巻頭
つれづれ

3

駅で見た不可解な花キャベツ

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5

複雑な国際環境のなかで平和認識・平和構築に
「芸術の感性に訴える力」を借りる
平和ミュージアムの役割立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐〕ここが
見どころ

7

「傷つきやすさ」

ージュディス・バトラー『生のあやうさ』から展示を考える

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕運営委員
リレー連載

8

学生の15年戦争認識の変化とどう向き合うか

ー南京虐殺、日本軍慰安婦、朝鮮併合などー

立命館大学国際平和ミュージアムメディア・資料セクター長
藤岡 惇〔立命館大学経済学部教授〕ミュージアム
おすすめの
一冊

10

『ゲノム科学の展開』 藤山秋佐夫・安田和基 他著（岩波書店 2011年2月刊）

『現代生物学入門』第2巻 浅島誠 他編）

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
鈴木 健二〔立命館大学薬学部教授〕

ミニ企画展

11

開催報告（2012年10月～2013年2月）

事業報告

12

- 特別展 世界報道写真展2012
- 2012年度 秋季特別展 未完の作品／永遠のはじまりー「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える
- ミュージアム開設20周年記念 国際平和シンポジウム開催報告／学生平和フォーラム開催のお知らせ
- 第59回不戦のつどい「わだつみ像」前集会
- 第19回 日本平和博物館会議に参加して

19

- 第6回 立命館附属校平和教育実践展示
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第6回 川崎市平和館
- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 山崎 淳子
- 2012年度入館者状況（2012年4月～2013年1月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE立命館大学
国際平和ミュージアムKyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『写真通信』



大正4年1月号表紙
縦21.7cm 横 30cm
1915（大正4）年



右：「堂島河岸の水柱—大阪の消防出初式」
左：「青島を襲ふて母艦若宮丸に帰りし我海軍飛行機」
（大正4年2月号より）

1914（大正3）年5月に創刊された月刊の写真通信誌です。

写真は19世紀半頃に日本に入り、19世紀末にコロタイプ写真製版印刷が実用化すると多数の写真の複製印刷が可能となり、写真絵葉書や写真アルバムが普及していきました。1900（明治33）年に私製葉書が認可されるとすぐに写真絵葉書が大流行し、また、写真誌も『写真通信』のほかにも、『写真タイムズ』や『写真時報』『写真情報』といった雑誌が多数発行されていました。写真によりニュースや風物などを伝えるスタイルは新しくて刺激的な手段として人気を呼びました。それまでも、描画や版画など、視覚的にニュースを伝える手段はありましたが、実際の場面を焼き付けた精度の高い写真の持つ臨場感には、それ以前とは異なる強度があったためです。

『写真通信』発行元の大正写真通信社は、東京に本社、大阪と名古屋に支社を置き、北海道、横浜、仙台、台湾、大連、京城、山陰、北陸に支局を持ち、国内や旅順、青島などに合わせて132の支部を持って展開していました。

『写真通信』の内容は、青島陥落などの軍事ニュースや、ヨーロッパを中心とした第一次世界大戦の様子、世界各地の珍しい出来事、相撲、名勝、文物などを写真で伝えるもので、天皇が観覧する「天覧」も受けていました。

この資料からは、当時、ニュースや風景などがどの



「大正ポスト」（大正4年2月号より）

ように視覚的に伝えられていたのかわかりませんが、同時にどのように受け止められていたのか、についての情報もあります。創刊翌年の大正4年1月号からは、「大正ポスト」と題した投書通信欄が設けられ、読者の声

や編集発行人からのメッセージが掲載されるようになりました。投書の多くは、掲載写真の批評や、取り上げて欲しい写真の要望、遅配に対する苦情等です。口絵でカラー刷りを増やして欲しい、女性の写真も掲載して欲しい、珍しい風景の写真を掲載して欲しいなど多岐に渡ります。更に、こうした投書に対して、女性の写真など掲載せずに格調を保って欲しい、軍隊の活躍の写真も紹介して欲しいといった投書に対する意見投書もあります。格調を保ちながら女性の写真を掲載する工夫が、「世界の女」という特集を組み世界各地の女性の姿を紹介しています。

『写真通信』は、当時の大軍事ニュースであった青島陥落号（イギリスとともに日本が第一次世界大戦に参戦し、中国におけるドイツの租借地青島を征圧した）や、即位特集号（大正天皇の即位の儀式にまつわる催事や文物の紹介）なども発行しました。ところがこれに対して「僕はもう青島の凱旋写真とか欧州の戦争の写真などはあきあきした」（大正4年2月号）という投書や、「なる丈なれば戦争画を出してください我国民は尚武の気質に富んで居ります」（大正4年5月号）といった投書もあります。やがて訪れた言論統制の時代に比べ、当時は自由に発言できたことがわかります。

また、投書の中には、ユーモアの混ざったものもあります。軍隊で郵便の検閲をしている兵士が、検閲中に目にしたこととして、ある人物が父に“風邪を引いて医者にかかったところ、暖かくするようにいわれたので、メリヤスのシャツを買う費用を送って欲しい”と無心する書簡を送っているのに、同日に今度は「花吉」（当時の水商売の女性の源氏名らしい）あてに“会いにいけなくて残念だった”と書き送っており、“果たして、本当にメリヤスのシャツを買ったのだろうか？”と投げかける投書があります。軍隊生活の中で『写真通信』を楽しみにしている読者もあり、慰問用の娯楽の要素もありますがくだけた内容です。しかし、その25年後、つまりこの頃に生まれた子ども達が大人になったときには、こうしたことを自由に出版することはできない社会になっていました。

（学芸員 兼清順子）

駅で見た不可解な花キャベツ

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 貴道裕子コレクションの感動

もう2ヶ月ほど前になりますが、年明け早々、「ジェイアール京都伊勢丹」7階の美術館「えき」KYOTOに出かけました。折から開催中の「てっさい堂」貴道裕子コレクション「美しき日本の小さな心一豆皿、帯留、ぼち袋」を鑑賞するためです。

同館は「企画展専門の美術館」で、幅広いジャンルの展覧会を開催しており、私も折にふれて訪れます。新春企画は「てっさい堂」という骨董品店を営む貴道裕子さんのコレクションで、江戸時代中・後期を中心とする膨大な数の豆皿や帯留やぼち袋を紹介した一種の民俗博物展。まさに、貴道さんの著書『手のひらにのる骨董』の世界そのもので、「小さきもの」に心動かされる貴道さんの「豊かな感性」と「確かな目」の集大成です。手のひらサイズの空間に、人間の無限の想像力と創造力が躍動している、とても刺激的な展覧会でした。私は、日本文化の深さや豊かさに改めて深く感じ入り、とても感動しました。

江戸中・後期にこのような文化が爛熟し得た背景には、社会が戦乱にまみれていなかったということも大きいと思います。昭和の「十五年戦争」の時代には、伝統的な文化の担い手たちも戦争に動員されていきまし、国際的にみても、ポル・ポト政権下のカンボジアでは、伝統的な文化を破壊するために知識人が大量に抹殺されたと言われます。平和は「文化を育むための重要な必要条件」に違いありません。

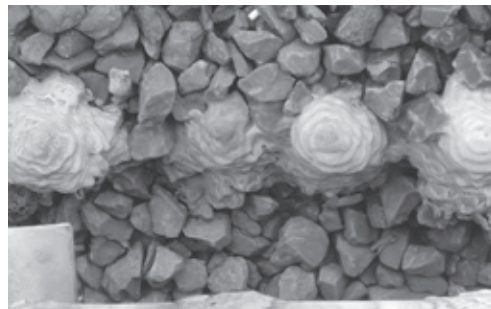
■ 線路端の奇妙な「花キャベツ」

ところで、美術館「えき」を訪れる途中、私はJR宇治駅で奇妙なものに出会うことになりました。

JR宇治はわが家と世界を結ぶ最寄りの駅で、いつも利用している駅です。京都行きを待っていると、同行した妻が1番線ホーム京都寄りの線路際に見慣れないものを発見したのです。

写真をご覧ください。これは、いったい、何でしょう？

ホームに足を踏ん張って線路を覗き込まないと見えないので、もう何千回もこの駅を利用していながら、私はこれまでまったく気づきませんでした。一見すると「花キャベツ」のようにも見えますが、石だらけの



花キャベツ

線路際に花キャベツなどある筈はありません。何層にも同心円状に重なったキャベツの葉のような構造物が、直径10～15センチメートル程に成長して、真ん中あたりは黄褐色に色づいています。他の番線の線路際にもあるのかと思い、物好きな私は後日改めてホーム沿いをずっと覗き込んで調べたのですが、こんな綺麗な「花キャベツ状堆積物」は写真に撮ったこの辺りに集中しているようでした。

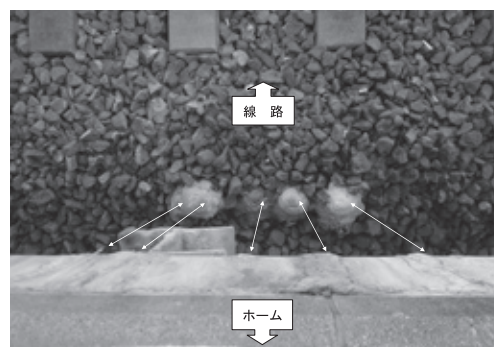
私は、京都駅の美術館「えき」での感動に出会う前に、わが家の最寄りの「えき」で「新春早々少々珍妙現象」に出会い、ある種の感懐を覚えたことでした。

■ ところでいったいこれは何者？

でも、これはいったい何なのでしょう？

よく観察すると、どうもこれは珍しがって喜んでいられるような現象ではないことが分かりました。

もう一枚の写真を見て下さい。

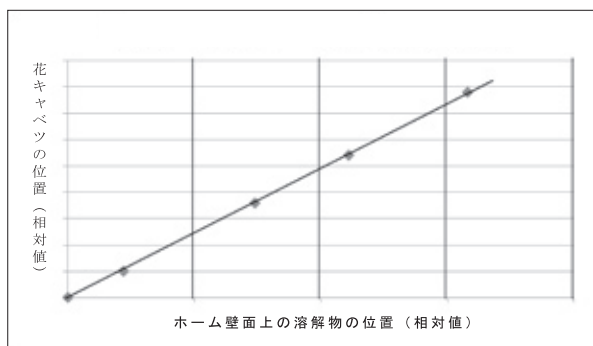


宇治駅花キャベツ解析

手前側に写っているホームの線路側壁面に、何か流動物が垂れ落ちたような凹凸があり、一番左側には細い「つらら」のようなものも見えます。写真には、こ

の壁面の凹凸の山の部分と、対応する「花キャベツ」を矢印で結ぶ線を引きました。写真では斜めの線に見えますが、どれもホームから線路面に垂直に向かっています。

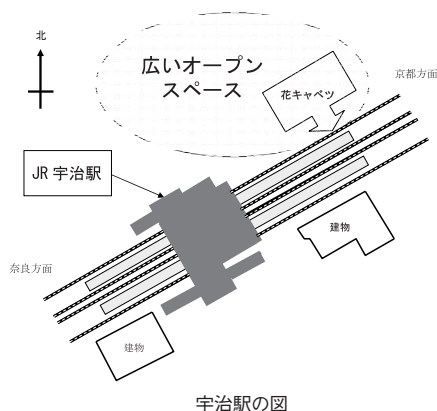
念のため、壁面の凹凸の間隔と、線路面の「花キャベツ」の間隔とがちゃんと対応しているかどうか、写真上で距離を測定してグラフを描いてみました（図を参照）。当然とは言いながら、非常に正確に対応していることが分かります。



「花キャベツ」とホーム壁の溶解物の位置関係

どうも、この「花キャベツ」の正体は、酸性雨がホーム壁のコンクリートの成分である炭酸カルシウムを溶かし出し、長い時間かかって垂れ落ちて、まるで鍾乳石のように堆積したもののようです。しかし、どうしてここにだけこんなに見事な「花キャベツ」が咲いたのでしょ

うでしょうか？ JR宇治駅の構造を見ると、下図のようになっています。「花キャベツ」が特異的に見られる京都寄りのホームだけが、雨や風や太陽の光をあまり遮るものがない広々とした屋外スペースに面しています。実は、このスペースの向こうには、ある工場の大きな煙突が立っており、よく煙を上げています。考えられることは、この辺りがホームの他の場所よりも酸性雨環境にさらされるチャンスが多い上、陽光を浴びて温められ、炭酸カルシウムを溶かし出す反応が進行し易かったということなのかもしれません。これはまだ私の仮説に



過ぎませんので、今後も観察し続けたいと思っています。

地球環境問題としての酸性雨

酸性雨とは、工場や車などから排出される窒素酸化物や硫酸酸化物が雨に溶け込んで、硝酸や硫酸と同じような酸性の性質を帯びた雨のことです。歴史的には、工業化先進国だったイギリスで最初に観察され、1872年に化学者ロバート・スミスが「マンチェスターのスモッグ」という論文で指摘しました。やがて、今日「酸性雨解明の父」と呼ばれているスウェーデンのスヴァンテ・オーデンが、大気だけでなく、水・土・森・建物などへの広範な影響について警告しました。20世紀には、北欧をはじめ、ヨーロッパ、アメリカ、カナダなどで生態系や文化財に対する深刻な影響が現れました。中国でも工業化が進んだ重慶などで大規模な被害が生じ、「空中鬼」と呼ばれて恐れられてきました。もちろん、ここ日本でも、1950年代後半の経済成長期から酸性雨被害が経験されましたが、近年は日常的にあまり話題にならなくなったせいか、私たちもややもすれば忘れがちです。原因物質は日本で発生するだけでなく、国境を越えて飛散してくるものもあります。

皆さんは、卵の殻を酢に漬けると泡を出して溶ける実験をやったことはありませんか。成分の炭酸カルシウムが酸と反応するからです。これと同じ原理で、酸性雨にさらされたコンクリートの中の炭酸カルシウムも溶け出します。私がJR宇治駅で見た「花キャベツ」は、現代文明が咲かせた一種の「徒花^{あだばな}」なのかもしれません。

Think globally, act locally.

平和学の分野では、よく“Think globally, act locally”（地球規模で考えて、地域から行動を起こせ）という言葉が紹介されます。しかし、いきなり「地球規模で考える」ことは容易ではありません。私は、最寄り駅のホーム際に咲いた「徒花」から、地球規模の環境問題に思いを馳せました。国際平和ミュージアムの合言葉は「みて、かんじて、かんがえて、その一步をふみだそう」ですが、まずは、身の回りを注意深く「みて」、ビビッと「かんじ」、そこに含まれる普遍的な意味を「かんがえ」、私たち自身が解決に貢献するために、臆せず「一步をふみだし」たいものです。

貴道裕子さんが「小さきもの」に「美の普遍性」を感じ取ったように、私たちも「等身大の日常的体験」の中に「地球大の普遍的問題」を感じ取れるよう、感度を研ぎ澄まし、広くアンテナを張りましょう。

複雑な国際環境のなかで平和認識・平和構築に 「芸術の感性に訴える力」を借りる平和ミュージアムの役割

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐)

■ 舞台劇化した生活環境から

最近いろいろ考えさせられるテレビ番組を見た。英国の国営放送局の第2チャンネル(BBC Two)でギャレス・マローン氏の合唱団活動についての放送であった。有名な指揮者であるマローン氏がイギリス・デボン州のチベナーの周辺にある英軍基地の軍人の妻たちのことを紹介していた。「半年おきにお父さんはいなくなる。私は慣れているが、出勤するたびに母が泣き続けます」という子どもの声や、「お父さんは帰ってくると、痛くなるまで抱きしめる」など、学校での取材から軍人キャンプの日常生活に深く埋もれている孤独さが伝わってきた。遠い国で見知らぬ相手との戦いに行っている夫たちの無事帰国を待ち望んでいる妻達の日常はキャンプの中に閉じ込められ、近くの住民とも交流がないことが番組で紹介されていた。その妻達を短い時間に訓練して、立派な合唱団を作り出すマローン氏の心構えも番組を見て感じた。日頃表に出せない感情が歌声に現れ、音楽の奥深さをマローン氏が我々に見せてくれた。チベナーの近くでの最初のコンサートは、町の中心にある市場で普通の日に行い、軍人の妻たちの存在を町民にアピールし、キャンプ内から外との交流の楽しさを妻達にも伝えたという印象をうけた。数か月後の最終コンサートは、ロンドンにある有名な音楽堂ロイヤル・アルバート・ホールで行い、帰国した夫たちの命を守ってくれたことへの感謝の声と心合わせだった。

身近なところで我慢強く孤独に我々の安定した暮らしを支えている方々がいることを、マローン氏の合唱団がチベナーの住民に伝え、さらにロイヤル・アルバート・ホールのフィナーレで、そのメッセージをより広く伝えた。この番組に内在していた感情は、英国や米国のアフガニスタンへ出兵している軍人の家族だけの静かな悲劇ではないと思う。無事の帰還を願う心は、国際連合の平和維持活動により海外に派遣されている平和維持軍の方々の家族にも似た苦しみを与えているだろう。このような事を我々は、日常的にどのぐらい意識しているだろうか。数多くの方の支えで平和が成り立っていることを絶えず意識させることも、立命館大

学国際平和ミュージアムの展示活動の重要な柱の一つであることを、この番組は私に新たに実感させた。

■ 複雑な多国に渡る武力紛争

チベナーのキャンプから出兵している軍人たちの行き先であるアフガニスタンの状況を見ると、紛争の複雑さと恐ろしさが見えてくる。パキスタンとアフガニスタンの国境周辺での武装勢力の戦いによる死者が多く、現在のアフガニスタン政府は自国の領土全域にわたって影響があるとは言い難い。最近まで政権を握っていたタリバン軍や彼らの支持者のアルカイダ武装団の影響は大きい。タリバン軍が定着している地域はアフガニスタンの領土だけではなく、隣のパキスタンの領土にもまたがっている。ここにいるアルカイダ武装団の構成員には、この両国以外の国籍の人もいっている。テロは国際化され、国の領土が無意味な線引きになっていることは、今日の武力紛争の複雑さと恐ろしさを表している。厳しい自然環境を背景に、国土を統一させる交通インフラも貧弱で、アフガニスタンを国として統一させるまで当分時間と金がかかる。その間、第三諸国から送ってくる国連の平和維持軍による、一般市民の命を守るための苦労がいかに大変か、がわかると思う。元英国軍隊の司令長官マイケル・ローズ氏の自伝の題名は“Fighting for Peace”であり、そこでは戦争を体験したものとして、いかに平和維持活動が困難かを強調している。

武力紛争を抑えて後も、再びその分裂された社会を健全化するのに大変な労力と知恵が必要である。私の母国スリランカも、3年前まで内戦にさらされていた。島国であってもスリランカのこの紛争は長年にわたって隣のインドの南の不安要因になり、インドの元首相までスリランカの武装団「タミル・イーラム解放の虎」の手で暗殺された。30年にわたって大変な思いをしてきた市民の日常の不安は、武装解除だけでは消えない。分裂されたスリランカの社会を再び一体化するのに、スリランカの過半数のシンハラ民族が住んでいる中部・南部地域と、タミル人が多く住んでいる北部地域を結ぶために、国道A9号線を数十年ぶりにアジア

開発銀行の借款でスリランカ政府が2003年の停戦合意のときに開通した。用心深い安全保障対策の下だったが、民族間の交流、経済効果、国の統合にこのインフラ投資が役に立ち、今2009年の内戦が終わった後、国の復興に大変役に立っている。残念なことです、アフガニスタンの厳しい地形と環境の中に、このような国を統一させるためのインフラ開発には当分時間と金がかかる。

タイとマレーシアの国境周辺も、1970年代の武装勢力による不安がこのように道路整備をはじめ自由貿易地域を設定し、両国をまたがってヒトとカネとモノの移動を可能にさせたことによって1980年代にこの国境周辺の地域で経済が栄えた。十数年前に考えられなかったことだ。1980年代の末期に国立マレーシア北部大学は、タイの国境周辺に設置された。ASEAN地域共同体の構成国であったことも、マレーシアとタイの国境周辺の武装勢力を抑えるための対話の場だったと思う。このような対話のもと、お互いにWin-Winの解決策を見つけられる制度的環境や物的インフラは、アフガニスタンとパキスタンの国境あたりでは未成熟な状況であると言える。困難な地域紛争が起きて後、避けようとしても大変なコストがかかる。紛争が終わっても、分裂した地域や国民を一体化するため何かが必要だろう。事前に防止できたら一番安上がりともいえる。

■ 感性に訴える力を借りると

マローン氏が音楽の力を借りて、我々に当たり前とと思っている安全安心の生活の陰の部分を気づかせてくれた。同様に芸術の力を借りて、モダン・ダンスの指導をしているドイツのヴォルフガング・シュタンゲ氏は、スリランカ北部の難民キャンプで元ゲリラ団の兵士と戦災で障がいを受けたスリランカ軍の共同パフォーマンスを企画し、マローン氏と同様に芸術の力を借りて和解の種をまいている。英国王立芸術大学院のジュリア・カセム氏は、旧ユーゴスラビア共和国を構成しているマケドニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナで戦災孤児を含め、障がい者と名門デザイナーの出会いの場を作り、前者の日常的取り組みが後者の刺激になり健常者も障がい者も両者が楽しめる商品やサービスを開発している。聴覚、視覚、身体と知的障がいを持った方々の潜在的適応力がデザイナーたちにインスピレーションを与え、関係者の間の絆を深めたと言われている。ボスニア、セルビアとクロアチア間で以前あった文化的ネットワークや交流も、こ

のようなデザイン・チャレンジ・ワークショップによって復活された。この様に感性に訴える取り組みも、理性と同様に複雑な心境を超えて和解への道を見つけるために役立つ。平和構築にこのような手法も重要と感じた。

京都の立命館大学国際平和ミュージアムの企画展においても、芸術の力を借りて平和を語ろうとする取り組みを実践している。2012年度秋季特別展「未完の作品／永遠のはじまりー『無言館』収蔵作品から芸術の原点を考える」を開いた。企画を担当したミュージアムの学芸員の岸本菜穂美氏によると、戦時下の美術鑑賞環境として野見山暁治氏（洋画家）の文章には、以下のことが書かれているという。「その頃の美術学校の生徒は、油画科といいながら、西洋人が描いた油絵を見る機会は殆どなかった。西洋で絵の勉強をしてきた教授たちの絵を見る機会さえ減多になかった。古本屋を漁っては、今とは出来の違う粗末な印刷の画集に学び、時には止むに止まれず、無理をして高価な画集を手に入れ、憧れた画家の作品を真似るなどしていました」。野見山先生ご自身も、1943年に当時東京美術学校（現・東京藝術大学）を9月で繰上げ卒業し、その後出征した。

岸本氏によると、展示内容を考えるにあたって、以下のことを重視した。

1. 画学生の作品の中に「芸術の原点」があるとする。
2. 戦況厳しい時代でありながらも、絵を描かすにはいられなかった画学生たちの芸術への熱い想い（＝芸術の原点）を、この展示を通して伝えることを目指す。
3. 同情や哀れみのフィルターを通して見られがちな彼らの作品を、芸術に没頭していた人間の作品として見られることを目指す。
4. 戦時の被害だけでなく、加害の側面も伝えていくミュージアムとして、画学生たちが戦争で命を奪われたことだけを強調するのは避ける。

この様に人の心に平和認識を訴え、感性を刺激し平和を考えること、芸術の力により和解を広め平和構築に貢献できるような企画の重要性を痛感した。立命館大学国際平和ミュージアムの開設20周年を祝うさまざまな行事を終えて、ミュージアムの第3ステージプランにこのようなことをどう取り入れ続けるかを考えなければならぬことに、国内外の国際平和ミュージアム支持者のご協力を頂ければ光栄と思っている。

「傷つきやすさ」ージュディス・バトラー『生のあやうさ』から展示を考える

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加 國 尚 志

(立命館大学文学部教授)

国際平和ミュージアムでは、「平和」という語を、単に戦争がない状態ということではなく、人間の持つ可能性が阻害されることなく開花することのできる状態という意味で用いています。この考え方は、アマルティア・センが主張した「ケイパビリティ」(capability)という考え方に基づいています。単に戦争状態にないというだけでなく、個人が自らの可能性を展開するための手段にアクセスすることを妨げるさまざまな要因ー貧困、障がい、性差別、民族や人種の差別などーのない状態を「平和」な状態とすることができるとでしょう。戦争が「直接的暴力」なら、これらの阻害要因は「構造的暴力」と呼ぶことができます。これらの暴力にさらされる人間は、「傷つきやすさ」(vulnerability)をもつ存在であると言えます。「構造的暴力」に無関心ではない、ということは、人間の「傷つきやすさ」に対する感受性を持つことと深く関わっています。

この「傷つきやすさ」ということばは、20世紀のフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)が用いたことばです。レヴィナスはユダヤ系の哲学者で、親族をナチスに殺害されるという悲痛な経験を経て、戦争へと人を導くことのない思想として「他者」を尊重する倫理の必要性を主張しました。

レヴィナスは、他者は「顔」として私たちに対して現れ、その顔は私にはとらえきれない無限の彼方から「汝殺すなかれ」と呼びかけてくる、と述べています。そしてこの「殺すな」という呼びかけに応えることが「責任」である、としています。レヴィナスによると、私に向けられる他者の顔は極端なまでの「もろさ」を示しており、他者の「もろさ」に目覚めることが「平和」の始まりであることとなります。

アメリカの哲学者ジュディス・バトラーはレヴィナスのこの思想に注目した一人です。バトラーは『生のあやうさ』という著作で、2001年の9.11以降のアメリカではメディアによって「顔」の非人間化が行なわれていたことを指摘しています。イスラムへの憎悪をあおるためにビン・ラディンやサダム・フセインの顔が利用され、アメリカ軍を歓迎するアフガンの少女の顔が軍事行動の正当化として利用されたことを述べながら、それはたしかに「顔」を写したものはあるが、レヴィナスの言うような「もろさ」や「傷つきやすさ」は消し去られていた、とバトラーは述べています。イラク戦争に同調するメディアによって「顔」が利用され、戦争がスペクタクルとして消費される状況の中で「私たちは顔から逃げてきた」とバトラーは指摘しています。

権力側のメディアによる「顔」の利用に対して、レヴィナスがそこに「平和」の始まりを見ようとした「他

者のもろさ」に目覚める」ことをうながすような展示とはどのような展示なのでしょう。「構造的暴力」にさらされる「傷つきやすさ」をそなえた人間の顔の呼びかけに応えることが「平和」への歩みの始まりであるのなら、国際平和ミュージアムにおける「顔」の展示(「表象」)はどのような意味をもつものでなくてはならないのでしょうか。

バトラーは『戦争の枠組み』という著作で、戦争は「感覚の民主主義」をむしろむし、と述べています。たとえば戦争中のメディアは、自国の被害者に対しては哀悼や同情などの強い情動的反応を起こさせ、敵国の被害者に対しては冷淡な反応をひき起こすように仕向けるということが挙げられます。それは、自国の戦没者には追悼の意を表するのにも、他国の被害者には謝罪どころか否認という二次的暴力をふるう、という態度と共通しています。このような態度は、「直接的暴力」及び「構造的暴力」の被害者に対する感受性をすべて一挙に麻痺させるのではなくて、嘆くに値する生と嘆くに値しない生とを分けて差別に結びつけることによって「傷つきやすさ」への感受性を無力化します。アイデンティティと文化的区別に基づく政治は、このような差別を通じて、暴力に対抗する感受性を枠にはめ、無力化しようとしています。それは暴力をふるうものの姿を隠し、とりわけ構造的暴力を存続させようとするものです。

暴力に対するこのような感覚の規律化に対して、他者の「生のもろさ」に人間の共通の条件を見出す経験を与える展示を追求することも国際平和ミュージアムの重要な使命であると言えます。その意味で国際平和ミュージアムの展示、とりわけ写真等のイメージの展示は、歴史的事実の証言であると同時に、「直接的暴力」と「構造的暴力」にさらされるすべての人間の「生のもろさ」「傷つきやすさ」に気づく感受性から「平和」への志向を生み出すものであるべきでしょう。



車の移動とともに無蓋トラックで運ばれる慰安婦たち。
(『私の従軍中国戦線』(村瀬守保著・日本機関紙出版センター)より)

学生の15年戦争認識の変化とどう向き合うか —南京虐殺、日本軍慰安婦、朝鮮併合など—

立命館大学国際平和ミュージアム

メディア・資料セクター長 藤岡 惇

(立命館大学経済学部教授)

早いもので、立命館大学に奉職して34年。平和関係の科目を担当するようになって、25年がたちました。2012年度秋学期には、1回生担当の「平和学入門」、3回生担当の「平和の経済学」という2科目を担当しました。私の属するびわこ・くさつキャンパス（BKC）にあっては、学部を超えた共通教養科目のなかで「平和学入門」が唯一の平和系科目。3年前から2クラス開講となったおかげで、今年は620名の受講生を迎えました。ただしBKC6学部の新入生総数は3,614名です。履修率はわずかに17%。83%の学生は平和系科目を履修せずして、卒業していきます。

幸い経済学部では、3回生担当で「平和の経済学」という科目が設けられています。これも私が担当し、今年の受講生数は220名。「平和学入門」後に受けられる、BKC唯一の上級科目です。

両科目とも定期試験を廃止しました。多くのレポート課題を与えて、探究した成果を報告しあい、受講生全員に公開し、共有することの方を重視したからです。具体的には、科目のホームページに各自のレポートを掲載し、相互にコメントをつけあい、作成過程でも集団的に取り組むよう奨めています。なぜかといえば、万人を納得させうる正解がないテーマ、人類が正解を求めて模索しているテーマが論題だからです。公開して人目にさらしたほうがカンニングしにくいように思います。

今年は、15年戦争の問題を重視し、両科目とも、ミュージアムの参観を義務付け、次の7つの論題でレポートを書いてもらいました。平和学入門のばあい30問の論題のうちの7つ、平和の経済学のばあい34問の論題のうちの7つです。15年戦争論だけをとりあげていたわけではありませんので、念のため。

①南京虐殺をめぐる

「1937年7月に日中両軍の本格的な戦争(北支事変、日華事変)が始まりました。上海に大軍を派遣した日本軍は、上海での中国軍民の4か月におよぶ頑強な市街戦に手こずりながらも、首都の南京を攻略すべく西進し、12月13日に南京城内に侵攻し、陥落させました。『捕虜は取らない、現地で処分する』という日本軍の方針もあって、その過程で南京郊外と城内で多数

の中国人軍民が殺害されました。これが『南京虐殺』とよばれています。『南京虐殺』は戦争犯罪だったという見解と、そうでないという見解がありますが、どちらが真実に近いのでしょうか」というのが第1問でした。

②日本軍慰安婦をめぐる

「いわゆる従軍『慰安婦』には『性奴隷』的虐待を受けた者が多いという見解とそうでないという見解があります。どちらが真実に近いのでしょうか」というのが第2問でした。設問時には「従軍慰安婦」と表現していたのですが、ある受講生から「どの国のどの時代にも娼婦型の従軍慰安婦ならばいたはず。15年戦争下の日本軍によって拘束されていた『性奴隷』という特殊性を明示するため『日本軍慰安婦』と表示すべきだ」という「抗議」があり、「日本軍慰安婦」と表現し直しました。

③15年戦争をどう評価するか

立命館大学には、先のアジア太平洋戦争に際して、3,149名の学生を兵役で休学させ、朝鮮半島出身学生83名のうち、兵役志願を拒否した32名については退学処分にしたという歴史をもっています。その結果、豊川海軍工廠などの軍需工場で空爆にさらされ、非業の死をとげた先輩をはじめとして、約1千人の先輩が大学に戻ることができなかった歴史があります。これらの史実も紹介しながら、「満州事変以来の15年戦争は、日本にとって『自存自衛の戦争』であったという見解と『侵略戦争』であったという見解があります。どちらが正しいのでしょうか。その根拠は何ですか」という第3問に答えてもらいました。

④日本帝国による朝鮮統治や独立運動弾圧をどう評価するか

「大日本帝国による朝鮮統治の不当性を承認し、朝鮮独立運動の志士たちへの弾圧を日本政府（天皇）は公式に謝罪してほしいという見解を2012年8月14日に韓国の大統領が述べました。この見解は正しいですか、間違っていますか」というのが第4問でした。

⑤どの時点でどのような別の選択をしていたら15年戦争の悲劇は避けられたのか

「1945年8月に終わった戦争は、230万人の日本軍関係者の死（うち6割は餓死、16%が溺死、5割の遺骨は戻らず）、2千万人ともいわれる周辺諸国民の犠牲をもたらすかたちで、終結しました。このような惨事を招かない別の道はなかったのでしょうか。どの時点で、どのような別の道を選んでいたら、紛争のもっと平和的で創造的な解決がありえたのでしょうか。重要度の点で3つの時点を選んで、別の道の可能性を論じてください」という論題を第5問として設定しました。

⑥真実の共有にもとづく寛容・和解・共生の道を探ろう

「欧州連合の事績にたいして、2012年度のノーベル平和賞が与えられました。欧州、とくにフランス・ドイツの和解の経験にも学びつつ、東アジア諸国民の間での真実の共有と和解・共生を実現するために、何をなすべきかを探究し、その成果を披露してください」というのが第6問でした。

⑦ミュージアムで掘り出し物を発見し、友人と分かち合おう

第7問は、「他の受講生は注目しないだろうが、重要だと考える『掘り出し物』のテーマをミュージアム展示のなかから一つ、探しだし、調べた成果を披露してください」というもの。

「受付で見学日の入った赤の押印シールをもらえますので、レポートの表紙に貼り付けて提出してください。押印シールがあると、両科目とも5点加点します」と約束しました。

■感じたことと御礼

「平和の経済学」のばあいホームページへのレポートの提出期間が「平和学入門」より1か月ほど早かったため、ミュージアム見学前に、レポートを提出した学生が相当いました。そのためネット世界で溢れる不確かな情報をそのままコピーした、安易なレポートが11月—12月初めには、少なからず出現しました。たとえば①の論題に関して「南京の当時の人口は20万人だったのに、30万人の殺害など、見え透いた嘘」。②に関しては「内地や朝鮮半島からの強制連行や拉致、日本軍の関与を示す行政文書はないので、性奴隷とはいえない」、「慰安婦の中心は高給を食む娼婦」だった。③については「ABCD包囲網で石油資源を断たれた日本を救うための自存自衛の戦争だった」。④については「朝鮮併合は、当時の朝鮮最大の政治団体の求めに応じたもの。併合によって今日の韓国発展の土台がで

きたのだから、謝罪は筋違い」といった見解が目立ちました。⑤の解答については、歴史の趨勢^{すうせい}を見ずに、無理やり選択肢をひねり出そうとしてギブアップしたものが多かったし、⑥については「そもそも歴史観が違うので、真実の共有など不可能」など、最初から諦めているものが目立ちました。

初期のレポート群を読むなかで、戦後歴史学の「常識」とされてきた歴史認識が、若い世代の間に継承されていないことに驚きました。「新しい歴史教科書をつくる会」や「日本会議」による強力で組織だったキャンペーンのなかで、ここ10—15年の間に学校現場が様変わりしたこと、とくにネット世界では「日本会議」系の歴史観が強い影響力を持っていることは、想像の域を超えていました。

12月に入ってから、現下のネット世界内の論争にかみあう形での情報提供を行うとともに、ミュージアムを見学し、戦争の真相を見つめながらレポートを書くように要請しました。2009年にスペインのサンセバスチャン国際映画祭で最高賞を受賞し、世界中で有数の観客動員数を記録した陸川監督の映画『南京！南京！』が日本では妨害行動のために、どの商業映画館でも上映できなかったこと、2012年12月13日が南京虐殺75周年記念日であり、カナダのバンクーバーを始め、世界各地で追悼記念行事が大規模に行われたのに、当事国の日本では記念日がニュースにもならない不思議さについても触れました。

そのためもあり、年末から新年にかけて作成されたレポートには、事実としっかりと向き合ったものが多くなりました。「事実は真実の敵である」といわれますが、大きな真実の曼荼羅絵のなかに「事実」を位置づけ、生身の証言などに注目しだすと、若者の認識は急速に深まり、転換することがよく分かりました。ただ現在のミュージアムの展示内容が、これらの設問に正面から向き合い、探究を刺激し、示唆を与えるものになっているかと問えば、まだまだ多くの弱点をかかえていることも痛感しました。

いずれにせよ、11月から1月にかけて、20キロ離れたBKCの地からミュージアムを訪れた両科目の受講生は716名に達しました。今年のBKCからの訪問者数の7割余を占めたと思われます。

最後に一言。私は、2013年3月に定年退職します。4月以降も当面の間は「特任教授」となるとはいえ、ミュージアムとの関係は大きく変わります。思い起こせば1996—99年には企画局長、2000—2003年には平和人権研究セクター長、2007年からはメディア・資料セクター長を務めさせていただき、ミュージアムから大きな刺激とエネルギーを頂きました。長年のご厚情に御礼申し上げます。

『ゲノム科学の展開』 藤山秋佐夫・安田和基 他著 (岩波書店 2011年2月刊) 『現代生物科学入門』第2巻 浅島誠 他編

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 鈴木 健二
(立命館大学薬学部教授)



2012年秋は京都大学山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞受賞のニュースに日本中が沸き立ちました。ノーベル賞はいうまでもなく多くの科学者・研究者が憧れる(目標とする)最高の栄誉ですが、普通の人々にとっては身近な話題とは言い難いものです。しかしながら年末にか

けての新聞やテレビの報道はいつにもまして熱を帯びていたように感じられました。それは山中教授の親しみやすい人柄に因るばかりではなく、受賞対象となったiPS細胞樹立の技術がここ数年、将来の医療に革命を起こすものとして注目されてきたことが大きな理由ではないかと思われます。

ノーベル賞と医療との関係で思い出されるのはインスリンに纏るストーリーです。1923年のノーベル医学・生理学賞はフレデリック・バンティングとジョン・マクラウドのインスリンの発見に対して贈られました。インスリンは血糖を下げる唯一のホルモンであり、また深刻な社会問題となっている生活習慣病のひとつ、糖尿病の治療薬として今日でも使用されているものです。インスリンの発見(より正確に表現すればイヌの膵臓から血糖降下作用をもつ生理活性成分の抽出)から受賞までが2年という異例の短かさであることは大きな驚きですが、さらに特筆すべきはその試料が発見の翌年(1922年)には糖尿病患者に投与され、その治療効果が実証されたという事実です。「ヘルシンキ宣言(ヒトを対象とする医学研究の倫理的原則)」の中に「医学の進歩は、最終的にはヒトを対象とする試験に一部依存せざるを得ない研究に基づく。」という一節がありますが、1922年のインスリン投与実験はまさしくその典型的な例でありましょう。

今日のめざましい医療技術の進歩は、こうした研究者の絶え間ない努力によるものであることは言うまで

ありません。抗体医薬品や核酸医薬品のような新しい生物製剤技術や遺伝子治療、細胞療法など、その例には枚挙に暇がありません。そうした技術革新が私たちの健康の維持・増進に大いに役立ってきたことは確かですが、同時に、これまでの私たちの生命観や倫理観に大きな波紋を投げかけていることもまた事実です。妊婦の血液検査で胎児の染色体異常を検出する新しい出生前診断や、尊厳死法案と終末期医療をめぐる今日の議論が様々な問題を提起していることは記憶に新しいでしょう。

「ポストゲノム時代」、これは2003年のヒトゲノムの解読以降を表す言葉です。私たちの体を構成し、活動させているのは60兆個の細胞です。それらはみなたったひとつの受精卵のもつゲノム情報に導かれて分化増殖し、その結果として一個のヒト個体を形成し、そしてまた統合された生命活動を可能にしているのです。ヒトのゲノム情報は二重らせん構造を持つDNA分子上にA、G、C、T、4文字で表される塩基配列として書き込まれています。世界中の科学者が10年以上の年月を費やし、人類が自らの生命の謎に踏み込んだヒトゲノムプロジェクトの成功は、「ポストゲノム時代」という言葉に代表されるように医学生物学の研究領域を超えて我々の生活にとってもエポックメイキングな出来事であることを意味しています。科学の歴史では、パラダイムシフトといわれる、これまで広く信じられていた理論的基盤が崩れ去り全く新しいものに置き換わることがしばしばあります。天動説から地動説、古典物理学から量子物理学への展開などです。2003年に宣言された「ヒトゲノム配列の解読」は次代においてパラダイムシフトを引き起こす可能性を秘めていると考えられています。

本書では「ヒトゲノム計画とゲノム比較」「ゲノムの多様性と疾患」「ゲノム科学から明らかになった生物界における微生物の重要性」「近年脚光を浴びている新しいRNAの機能」「ポストゲノム時代の生命科学と社会との関わり」といった話題が比較的平易な言葉で語られています。本書は普段の私たちの会話の中にも度々登場する「ゲノム」や「DNA」といった言葉の本来の意味を深く掘り下げる良い機会を与えてくれるでしょう。

開催報告 (2012年10月～2013年2月)

第76回 「第6回立命館附属校 平和教育実践展示」 2012年10月14日(日)～12月21日(金)

毎年秋・冬季に実施している、立命館附属校の平和教育実践展示は2006年度より開始し、今年で第6回目を迎えました。この展示は、展示物を通じて初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、広く知ってもらおうとするものです。2012年度は下記の日程で開催しました。

【日程と展示内容】

①立命館中学校・高等学校

会 期：10月14日(日)～10月26日(金)
テーマ：「立命館中高における平和教育実践」
内 容：中学2年生による沖縄平和研修の様子や課題研究報告、中学3年生によるベトナムの海外研修の報告と、高校の各授業における平和学習の成果を展示。

②立命館宇治中学校・高等学校

会 期：10月28日(日)～11月9日(金)
テーマ：「ポスター 世界の国調べ……貧困・格差・内戦」
内 容：中学1年生の地理学習から「世界の国調べ」、中学2年生の歴史学習から文献調査による「モノが語る歴史」、3年生の歴史・公民を融合した近現代史の実践による「戦後史」の学習の成果をポスターで展示。



立命館宇治中学校・高等学校の展示の様子

③立命館小学校

会 期：11月11日(日)～11月22日(木)
テーマ：「立命館小学校 4年生が見つめ考える平和とは」
内 容：小学校4年生が実践した平和学習の成果をポスター展示し、それらを中心に立命館小学校の平和教育への取り組みを紹介。

④立命館守山中学校・高等学校

会 期：11月25日(日)～12月7日(金)
テーマ：「14才が感じる平和～広島平和学習から～」
内 容：中学2年生が広島平和研修の取り組みを通じて感じた意識の変化と、「戦争」や「平和」に対する考え方や想いをポスターで展示。

今号では2012年10月から2013年2月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

⑤立命館慶祥中学校・高等学校

会 期：12月9日(日)～12月21日(金)
テーマ：「平和への想い 北の立命から世界へ」
内 容：中学2年生による平和を表現する美術作品「バルサ・タワー」、中学3年生の平和学習の成果としての「幸福」をテーマに作詞した「平和SONGS」、高校1年生による広島・長崎平和研修フォトエッセイ、高校2年生の海外研修から、ドイツ国際平和村に関わる活動についての報告、高校3年生「アジア学」の学習成果として「サイコロくんASIAバージョン」を展示。



立命館慶祥高校3年生による「サイコロくんASIAバージョン」

各校の展示の様子は、P.19でも紹介しています。

第77回 「ウラジオストクにおける日露民衆交流の歴史と現在—『シベリア出兵』との関わりも含めて—」

2013年1月12日(土)～2月3日(日)

極東ロシアの中心都市ウラジオストクは、今日、アジア太平洋地域へ向いて開かれた窓として、経済、文化交流の拠点として、地政学的にもその重要性が増しています。明治、大正時代、この地には多くの日本人が商店や銀行などを営む日本人街が存在していました。

本展では、歴史の荒波にもまれながらも、現代へ引き継がれた日露交流の歴史とウラジオストクの素顔を、特に民間レベルでの交流に重点をおいて紹介。かつての日本人街の賑わいや日本軍のシベリア出兵、そして様々な分野で文化交流を発展させている現在の姿などを伝える写真約60点を中心に展示を行いました。



関連書籍を閲覧する見学者

世界報道写真展2012 – WORLD PRESS PHOTO 2012 –

～立命館大学衣笠キャンパス(KIC)会場～

会 期：2012年9月19日(水)～10月14日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム

中野記念ホール

参観者：6,632名

公開記念講演会

演題：『東日本大震災～そして現在そこから見える
こと、考えなければならないこと』

講 師：恒成利幸氏(朝日新聞社カメラマン)

日 時：2012年10月9日(火) 14:40～16:10

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 以学館4号

聴講者：184名

～立命館大学

びわこ・くさつキャンパス(BKC)会場～

会 期：2012年10月16日(火)～11月1日(木)

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス

エポックホール

参観者：2,303名

公開記念講演会

演題：『東日本大震災～そして現在そこから見える
こと、考えなければならないこと』

講 師：恒成利幸氏(朝日新聞社カメラマン)

日 時：2012年10月16日(火) 12:15～13:00
13:30～14:15

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
エポック立命21 1階ロビー

聴講者：1回目55名、2回目29名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館
公益社団法人日本写真協会
公益社団法人日本写真家協会、京都府
京都市、京都府教育委員会
京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局(衣笠キャンパス開催分)
KBS京都、滋賀県、草津市、大津市
滋賀県教育委員会、草津市教育委員会
大津市教育委員会
NHK大津放送局(びわこ・くさつキャンパス開催分)
びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社



びわこ・くさつキャンパス(BKC)会場の様子

～立命館アジア太平洋大学(APU)会場～

会 期：2012年11月4日(日)～11月18日(日)

会 場：立命館アジア太平洋大学 本部棟2階

コンベンションホール

参観者：2,672名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社
世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館
公益社団法人日本写真協会
公益社団法人日本写真家協会、大分県
別府市、大分県教育委員会
別府市教育委員会、NHK大分放送局
大分合同新聞社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社
別府商工会議所、社団法人別府青年会議所

協 力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

「世界報道写真展」は毎年、6月から11月にかけて全国各地を巡回する恒例の写真展で、今年55回目を迎えました。オランダで新年早々に開催される世界報道写真コンテストにより、今年も5247人(124の国と地域)の写真家が応募した10万1254点の中から、受賞作品が選ばれました。ほぼすべての受賞作品を展示する本展はまた、4月にアムステルダムで開幕した後、1年を通じて45の国と地域、約100の会場で開催される世界規模の写真展でもあります。日本を含めて、世界中で200万人以上の人が目にする最大級の写真展とも言い換えることができます。

本展は「一般ニュース」「現代社会の問題」「ニュースの中の人々」「ポートレート」「スポーツ」「自然」など9つの部門に分かれています。部門ごとに1枚で表現する単写真のほか、複数の作品によって成立する組写真が受賞対象になっており、それぞれに1位から3位が選ばれます。受賞作品の中から大賞作品が選出されますが、1年に1枚しか選ばれない大賞受賞は多くの写真家にとって目標であり、その受賞は大きな栄誉となります。今年は56人が受賞を果たし、スペインのサムエル・アラランダ氏が撮影した写真「サレハ大統領に対する抗議デモの間に負傷した息子を抱きかかえる女性（イエメン・サヌア）」が大賞に輝きました。

また、今回は、2011年3月11日に発生し、多くの犠牲者を出した「東日本大震災」と大津波による爪痕を撮影した写真家が7名受賞しています。恒成利幸氏（朝日新聞社）、手塚耕一郎氏（毎日新聞社）、千葉康由氏（AFP通信社）の3名の日本人をはじめ、各人が独自の視点で切り出した被災地や被災者の人々の写真は、見る者を約1年前のあの日に連れ戻してしまうほど強く訴えかけていました。

衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパス、APUともに、多くの方々にご来場いただき、盛況のうちに終了することができました。今年は講師に朝日新聞社カメラマンで今回の世界報道写真展・一般ニュースの部・単写真3位を受賞された恒成利幸氏をお招きし、講演会を開催（衣笠・BKC）いたしました。恒成氏には、東日本大震災を取材された体験談を、写真上映と共にお話いただきました。

震災発生からすぐに行動を起こしたものの現地に着くまでに既に困難が多かったこと、大変な事態が発生していることを実感していったことを、取材に向かう行程を語りながら講演されました。現地での取材にあたっての心境、被災者を取材すること、カメラマンとして伝えなければならないことなど、カメラマンとして報道する義務を担いつつ、震災被災者に寄り添った報道を心がけていると語る恒成氏の講演に、聴講者は熱心に耳を傾けていました。

本展および本講演会を通じて、来場者のみなさまには、世界の「今」を見つめ、報道写真家のメッセージを感じ、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにさせていただけたものと考えております。

世界報道写真展参観者の感想

- 見ていて、これが現実だとは信じられなくなるような光景ばかりで、写っている人々の苦しさや痛みすべてが伝わってくるような写真ばかりで、何度も目を背けてしまいました。こうして実際に起こっているありのままの事実を知ることは必要だと思う。是非たくさんの人に訪れてほしいと思いました。（本学学生、20代、女性）
- 日常では決して報じられることのない写真ばかりで、中には思わず目を背けたくなるようなものもありました。しかし、

衣笠キャンパス会場

それは決して目を背けてはいけず、自分が生きている間に地球上のどこかで起こっている1つの真実としてしっかりと受け止めないといけないものであると思いました。写真であるからこそ、その1枚に込められた想いというのが非常に重く、訴えかけてくるものが凄かったです。今この瞬間もどこかで紛争などが起こっていると考え、自分がこの状況に置かれている事実が信じられないです。本当に多くのことを考えさせられた写真展でした。

（本学学生、20代、男性）

世界報道写真展参観者の感想

- 世界の「いま」を写す写真や、歴史がまさに変化している「瞬間」を捉えた写真を見て、1枚1枚じっくりと自分の中で吟味し考える時間になりました。普段、日本で生活しては感じられないからこそ、こういう世界の現実を見ることができ、ひとつの大切な学びの機会となりました。（本学学生、20代、男性）

びわこ・くさつキャンパス会場

- 平和とは何か？を訴えていた写真ばかりでした。悲痛で、世界各国では常に事件が起きてばかりいることに閉口せざるを得ません。紛争やデモ、犯罪のある日々、映されたものは私たちに様々な何かを伝えてきました。それらをしっかり噛みしめて、私たちもきちんとその意味を認識すべきだと思います。しかし、この写真展の中に、平和というか、さんぜんと輝くものを感じたことも事実です。本当にためになりました。（本学学生、20代、男性）

世界報道写真展参観者の感想

- 毎回このような機会を設けていただき本当に感謝しています。APUにいとたくさんの国際学生に囲まれて、世界が近いはずなのにまだまだ知らないことがたくさんありました。写真に出てくる国の国際学生は、その地の社会問題をどう受け止めてるのでしょうか。気になります。（APU学生、10代、女性）

立命館アジア太平洋大学会場

- 衝撃が全身に走りました。思わず悲鳴を上げる写真を見ました。しかし、この悲鳴よりもっと多くの声を世界は上げていることを知りました。これが世界の人々の声ならこれからの未来は今生きている私たちしか、変えられないのだと心に衝撃が走りました。（APU学生、10代、女性）

未完の作品／永遠のはじまり

—「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える

会 期：2012年10月23日(火)～12月1日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参 観 者：12,489名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

企画協力：一般財団法人 戦没画学生慰霊美術館無言館

後 援：長野県、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都
朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学、武蔵野美術大学



展示会場の様子



講演会の様子



公開記念講演会 「無言館」のこと

日 時：2012年11月11日(日) 14：00～16：00

鼎談講師：野見山暁治（洋画家） 窪島誠一郎（「無言館」館主）
安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎科学・平和事務所所長）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

聴 講 者：180名

立命館大学国際平和ミュージアムでは開設20周年記念特別展として、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の収蔵作品37点を中心に、戦争で画業の夢を断たれた若者たちの遺した作品から「芸術の原点」を考える展示を開催いたしました。

「無言館」のご協力により、国際平和ミュージアムでは2005年から「無言館／京都館—いのちの画室(アトリエ)」を常設展示しています。

15年戦争における侵略戦争の戦時体制は、多くの若者を軍隊に招集し、かけがえない生命と未来の可能性を奪いました。戦争の悲劇と平和の尊さを伝える展示として、戦没画学生たちの遺した作品は多くのことを私たちに問いかけています。

本展では、こうした戦没画学生の作品にこそ、あらゆるものを破壊する戦争の暴力にも奪うことのできない、人間の創造的営みとしての「芸術の原点」があるという観点に立ち、「学校生活」「習作と作品」「未完の作品」「作品とことば」という4つのセクションから、彼らの青春時代、制作の過程、創作への想いなどを伝えることを試みました。また、ミュージアムが京都にあることもあり、「無言館」を訪ねることが難しくなったご遺族の方にお越しいただく機会になればという思いもあっ

て、京都を含む関西出身の戦没画学生の作品も展示しました。

自分もいつか出征することを肌で感じながらも、残された時間を芸術に賭けた彼らの作品をご覧いただき、「芸術とは何か」「なぜ人は絵を描くのか」「限られた<今>を見るとはどういうことか」という切実な問いかけを感じていただきたいという思いを込め、開幕の日を迎えました。

11月11日(日)には関連イベントとして、野見山氏、窪島館主、安斎名誉館長の鼎談講演会を開催し、約180名の方にお越しいただきました。鼎談の中で、窪島館主が野見山氏と共に全国の戦没画学生のご遺族から作品を集める中で、無言館設立を決意したこと、ご自身も東京美術学校を繰り上げ卒業後出征した経験をもつ野見山氏からは、凍てつく色のない戦地で見つけたミカンの皮のオレンジ色がご自身の創作の原点であること、ご自身の作品に完成はないことなどをお話いただきました。鼎談中、窪島館主からは、今回の展示に関して「無念の涙とかそうした言葉にくぐられがちな絵が、自己表現として、絵として遇されている」という言葉もいただきました。

画業半ばに^{たお}斃れたという意味では彼らの作品は「未完の作品」です。しかしその作品群は、迫り来

る戦争と死を感じつつ、わずかに与えられた「今」を永遠のものにしようとする彼らの真剣な努力を伝えてやみません。皆様から頂いたアンケートには、そのことを受け取られたことをうかがわせるものが多数寄せられていました。

平和の大切さを伝え、現在を生きる私たちが平

和を築く主体者であることに気づき、自ら平和のために何ができるのか？その一步を踏み出すきっかけになることを目指す「平和ミュージアム」として、これからも様々な展示に挑戦していきたいと思います。

特別展見学者の感想より

- 暗くて入るときは怖かったけど、入ったら1つ1つの絵の作者さんの気持ちが伝わりました。戦争とはと、絵で知ることができたと思います。
(10代女性、中学生、北海道)
- じっと見入ってしまう内容のものだった。戦争を感じさせない作品に対して、作家、学生たちの戦没場所と日付がさびしかった。(20代女性、本学学生、京都市)
- 私たちとちょうど同じ年代の方々が残した作品からは、心に刺さるようなものを感じました。
(20代男性、本学学生、大阪府)
- 無言館の展示が関西で開かれるときは必ず見えています。今回は作品数が少なかったものの、1つ1つ丁寧にプロフィール説明等が掲示されていて、わかりやすかったです。入口の教室風景の写真パネル、そして出口のスライドの演出がとても気に入りました。言いようのない無念さ、しかし、青春を生き抜いた彼らに、心から「キミたち、えらかった！」と声をかけてあげたくりました。
(50代女性、教育関係者、京都市)
- 以前に長野の無言館へ行ってきましたが、その時になかった作品が多くて今日も来てよかった。私の父も大阪美術大学出身でしたが戦争のため、絵を描くことを断念し、その後はニューギニアで戦死しました。多くの才能を摘み取ってしまった戦争を私たちは忘れてはいけないと思います。
(70代女性、京都府)
- 芸術に打ち込んでいるせいか、作品に戦時の悲壮感が少なく、むしろ制作が楽しくてしかたないという感じがしたのが意外でした。(40代男性、会社員、兵庫県)
- 未来に希望をもった才能ある若い人材が戦争で芽をみとられた無念さや少しでも自分の足跡を残そうと頑張った作品を見て、改めて平和の大事さを感じた。
(60代男性、京都市)
- 上田市にある「無言館」のことは以前から知っており、いつか訪れてみたいと思っていました。新聞で、いくつかの作品を平和ミュージアムで展示していることを読み、来ました。厳しい時代に生まれ育った学生さん、また、画家たちの方々が魂を込めて作られた作品なのだ実感し、せつない気持ちにもなりました。私自身も若いころは平和についてそれほど考えたこともありませんでした。結婚し、母親になってからは、平和であることのありがたみをつくづく感じるようになりました。多くの若い人たちに、このような展示をぜひ見て欲しいと思いました。
(40代女性、京都市)
- 制作者の背景などが記載されており、また熱のこもった文などが同時に記載されてとても理解できた。
(60代男性、会社員、横浜市)

公開記念講演会（鼎談）聴講者の感想より

- ずっと行きたいと思いながらなかなか無言館へは行けず、3年の時が過ぎていた頃、ふと今回の企画を知りました。窪島さんの本や無言館の関連のことを読んだり調べたりしていたのでご本人のお話を直接聞いたことは本当に良かったです。これからの無言館の行方が私も気になります。若い私達、次世代を担う私たちがもっとこの絵を無言館の存在を今、知って考えていくべきかと思いました。
(20代女性、大学生、大阪府)
- 絵を描くということについての各氏の心からの言葉が美しく胸を打たれた。
(60代男性、京都市)
- 大学での企画にもかかわらず、学生・若者の聴衆が少ないことに、折角の機会なのに残念と感じました。会場として落ち着いて良い点もありますが、もっと沢山入場出来る会場で、多くの学生を聴衆に迎えるの会であってほしかったと思います。無言館も平和も将来へつなげていくことが必要だからです。
(60代女性、大阪府)
- 戦争のこと、画家のこと、私の生活からは遠い存在のことを少しのぞき見れたような気持ちになりました。震災を経験された方が無言館の作品を見て「生きていこうと思います」と言われた言葉が心に残りました。
(40代女性、京都市)

平和教育・研究の可能性を探る 国際平和ミュージアム開設20周年記念 国際平和シンポジウム「平和研究所の軌跡・課題・可能性」を開催

11月30日(金)、衣笠キャンパスにおいて、国際平和ミュージアム開設20周年記念国際平和シンポジウム「平和研究所の軌跡・課題・可能性」を開催しました。

平和と民主主義を教学理念とする立命館大学が国際平和ミュージアムを開設して20年が経過し、当ミュージアムは一般市民の社会教育、小中高校生の平和教育、大学の平和学講義を支援する役割を果たしてきました。現在も、国内外から平和研究を推進する機能のさらなる充実も求められています。

本シンポジウムは、国際問題や平和に関する専門家を迎え、国内外の平和研究所の現状や課題について報告と討議を行い、今後の平和研究と平和博物館にとっての大学附属研究所の意義と必要性について検討することを目的として開催されました。

最初に、主催者を代表して川口清史・立命館総長より、「最近、領有権問題で『若者に血を流せ』との言説が出る事態に危機感を覚えている。戦争との向き合い方が問われており、国際平和ミュージアムの役割に対する期待が高まっている」との挨拶があり、続いて安斎育郎・国際平和ミュージアム名誉館長(立命館大学名誉教授)が「ミュージアムにおける平和教育・研究の取り組み・到達点」と題して、国際平和ミュージアムがこれまで取り組んできた平和教育・研究について報告しました。報告の中で安斎名誉館長は、国際平和ミュージアムが世界初の大学立の総合的平和博物館として誕生した経緯、国際平和博物館会議の開催など国内外の平和博物館とのネットワークを築いてきたこと、多くの小学校、中学校、高等学校と連携し平和教育を展開してきたことなどを報告しました。

引き続き、今年のノーベル平和賞を受賞した欧州連合の駐日大使であるハンス・ディートマール・シュヴァイスグート氏による来賓挨拶が行われました。大使は、EUの過去60年間における経験から学んだことは、国家間が力比べすることで、平和が保障されることはない。国と国の関係の中心に法の支配を据えることによ

り、対話を制度化することにより、過去の紛争の痛ましい記憶を克服するため、政治的指導者が絶え間ない努力を続けることにより、それは達成されるものです。今享受している貴重な平和を守るためには、市民も絶えず注意を払うべきであると指摘されました。

続いて「平和研究の課題」と題して、東京大学名誉教授である坂本義和氏による基調講演が行われました。基調講演では、平和研究は平和の研究ではなく、平和のための研究であり、人間の安全というより人間の尊厳を守る。そして守られる人間が世界に一人でも多くなることが平和研究の課題である。現代のトレンドに内在する矛盾を6点(①世界の支配構造、②グローバル化、③情報化、④環境破壊の深刻化、⑤領土・領海の問題、⑥人口構成の変化)にわたって解明し、権力の多極化が戦争の危険性をゼロにしないことなどを指摘されました。



坂本義和氏(東京大学名誉教授)

その後、君島東彦・立命館大学国際関係学部教授がコーディネーターを務め、坂本氏に加え、東京大学大学院総合文化研究科教授である佐藤安信氏、東京女子大学現代教養学部教授である古沢希代子氏が参加し、パネルディスカッションが開催されました。佐藤安信氏は「持続的平和研究:『人間の安全保障』のための『企業平和責任』」と題して、①国連グローバル・コンパクト(UNGC)における平和への課題、②人間の安全保障とUNGCの関係、③企業平和責任:UNGCの可能性と限界、④エネルギー/環境問題、財政/金融危機に立ち向かう新たな公共倫理とガバナンス、との内容で報告があり、古沢希代子氏からは、「ジェンダー、フェミニズムの視点がなぜ平和研究に必要なか」と題して、①日本が本当に平和な国か(領有権問題、慰安婦問題、米軍基地問題、原子力発電所問題)、②「平和学・平和研究」に期待すること(現実を動かす力、ジェンダー・フェミニズム視点で開ける視界)、③「国際平和ミュージアム」に期待すること(真実追求とわかちあいと行動の拠点となること)、との内容で報告がありました。



EU シュヴァイスグート駐日大使

学生平和フォーラム開催のお知らせ

ディスカッションでは、平和構築やジェンダーなどそれぞれの専門分野から、これからの平和研究や大学附属研究所のあり方や方向性について、活発な意見が交わされました。

最後にモンテ・カセム・国際平和ミュージアム館長(立命館副総長)による本シンポジウムのまとめとして、①平和には納得が必要、そのためには教育機関の責任が大きい、②地球的視点でみること、共同体など境界を超える視点の重要性、③平和とは「生命」を祝うこと、生命現象は外部から元気を得て再生していくこと、④グローバル化と自由・平和を守る責任体制の構築の必要性、⑤研究の高度化(複雑な事象の理解)⑥社会との対話、世代間交流の必要性、⑦平和ミュージアム展示の高度化課題、などが示され、シンポジウムは閉会しました。当日は、12大学・研究機関から研究者、学生、院生、教職員に加え、市民、マスコミなど80名が集まり、来場者一人ひとりが改めて平和に



パネルディスカッションの様子

について考える機会となりました。

なお、坂本義和氏の基調講演と、ハンス・ディートマール・シュヴァイスグート大使のEU報告の内容については、『立命館平和研究ミュージアム紀要』14号(2013年3月発行)に掲載を予定しています。

国際平和ミュージアム開設20周年記念学生企画 「Forum for Peace Making(学生平和フォーラム)」の開催

国際平和ミュージアム開設20周年記念学生企画として、「学生平和フォーラム」を3月17日に開催します。本番開催に向けては、APU平和学習交流プログラム(12月2日実施)、韓国・慶熙大学校課外自主活動交流(12月5日～8日実施)、東アジア平和人権キャンプ・立命館大学生と韓国の4つの大学生による交流企画(2月17日～21日実施)、日中学生交流プログラム・立命館大学生と中国復旦大学生による交流企画(3月14日～16日実施予定)など事前交流・学習活動が実施されます。

(1) 開催概要

日 時：2013年3月17日(日) 10:00～18:00

場 所：立命館大学衣笠キャンパス 敬学館・国際平和ミュージアム

(2) テーマ

本企画では、平和に関する取組みを扱うにあたって、国際平和ミュージアム設立理念である「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」こと、および開設20周年のキーコンセプト「地球市民の記憶と未来。世界へと発信する平和教育の新たな歩み」と合わせて、以下の点を重視し平和について考察できるようフォーラムの構成を組み立てます。

- ① 非暴力・人権尊重の立場に立った対話による平和創造
- ② 国家、民族を超えた視点での課題アプローチと「地球市民」としての意識
- ③ 共生社会の実現と人権の尊重
- ④ 未来における平和創造に向けて現代の主体的な行動の重要性

(3) スケジュール(予定)

10:00-10:30 【開会挨拶と講演】 講 師：加國尚志副館長

テーマ：「21世紀の平和課題と未来世代による主体的な学びへの期待」

10:30-12:10 【学生報告】 未来に向けた関係構築(対話の力)/安全保障のパラダイムシフト

- ①立命館アジア太平洋大学平和学習交流プログラム
- ②慶熙大学校課外自主活動交流プログラム
- ③東アジア平和人権キャンプ
- ④日中学生交流プログラム(中国・復旦大学)

13:05-14:00 国際平和ミュージアム見学

14:10-16:30 【グループワーク】 テーマ：東アジアの平和創造と相互理解に向けて

16:45-17:45 【グループワーク発表】

17:45-18:00 【閉会挨拶】 モンテ・カセム館長

第59回不戦のつどい「わだつみ像」前集会 1943→1953→2013

2012年12月6日、国際平和ミュージアム「わだつみ像」、12月7日、びわこ・くさつキャンパス「嵐の中の母子像」前において、第59回不戦のつどい（主催：実行委員会）が開催されました。

「不戦のつどい」は、立命館大学が学生を戦地に送り込んだ苦渋の過去の反省の上に、大学は「二度と学生を戦地に送らない」、学生は「二度とペンと銃を銃に持ち替えない」という誓いを新たにします。

1953年12月8日に広小路学舎においてわだつみ像建立除幕式が執り行われ、その翌年より、わだつみ像前にて第1回の不戦のつどいが開催されました。その後毎年欠かさず不戦のつどいが開催され、今年で59回目を迎えました。

代表挨拶のなかでも、戦後、立命館が「平和と民主主義」の教学理念を慈しみながら、国際平和ミュージアム創設にこめた思い、平和創造への大学の社会貢献の面で今後ミュージアムが果たすべき役割にも触れ、この「不戦のつどい」の機会に広く平和の大切さを共有される場となりました。

2013年は、「学徒出陣70年」、「わだつみ像建立60年」を迎え、「不戦のつどい」も60回を数えることとなります。

立命館が「わだつみ像」を平和の象徴として建立し、二度とペンと銃を銃にかえないと決意したことを、今後も学園内外に広く伝えていきます。

第78回ミニ企画展示「京都青春時代：学生と戦争の風景」（～2013年4月7日 2階ミニ企画展示室）のなかでも、戦時中の学生の生活の様子を紹介し、彼らが葛藤し、苦悩する姿にせまります。



第59回不戦のつどい「わだつみ像」前集会の様子（2012.12.6）



わだつみ像建立除幕式（1953.12.8）

※ 2013年はわだつみ像建立60年を迎えます。

第19回日本平和博物館会議に参加して

2012年11月8日・9日、広島平和記念資料館を会場に第19回日本平和博物館会議が開催され、当館からは安齋名誉館長、カセム館長含め4名が参加しました。全国の平和博物館10館が加盟し、毎年この時期に協力関係の強化と情報交換を目的に会議が開催されています。

今回は、今後の連携のあり方や日本の平和博物館の動向把握に向けた協力などについての協議、情報交換のほか、被爆体験証言の聴講、幹事館である広島平和記念資料館の尽力により実現したパネル展示「平和博物館を知ろう」の開催など充実した内容となりました。日本平和博物館会議加盟館全体では、毎年200万人を超える入館者があります。日本の平和博物館は平和に

ついて考える重要な場として機能しています。しかし、その活動を取巻く状況は急速に変化しつつあり、全体の動向把握を深めることも今後の課題です。

松本都美子氏の被爆体験証言では、静かな語り口の証言者の言葉に会場が引き込まれていきました。とすれば、「残酷」「怖い」という直情的な反応を持って身構えてしまいがちなテーマですが、私達に向けて冷静に、ただ自分の体験だけを語る証言者の言葉は、その後の展示室の見学において心の眼を開いて見る布石になりました。

また、加盟館の概要を紹介したパネル展示「平和博物館を知ろう」では、一般の来館者を前に、各館の参加者が館の活動や資料、歴史的背景などを簡単に解説しました。多くの方々に「平和博物館」の存在を知ってもらう契機に、また、加盟館同士もそれぞれの活動をより深く理解するよい機会となりました。



松本都美子氏の被爆体験証言



各館からの参加者による解説
（ひめゆり平和祈念資料館）

「立命館附属校が発信する平和創造に向けた取り組み」

国際平和ミュージアム運営委員

一貫教育部副部長 遠藤 健治

立命館は「平和と民主主義」を教学理念とし、「自由と清新」の建学の精神の基で、全人教育を行なう教育・研究機関です。

全人類が、平和な世界を熱望するものの、現在もお、民族主義や国家主義の対立、紛争をはじめ、飢餓・貧困、差別など、平和に関して残された課題はまだ山積みです。立命館大学国際平和ミュージアムは、「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者を育む」という理念の基に、世界でも珍しい大学立の平和博物館として開設し、今年度、開設20周年を迎えました。2006年に制定された立命館憲章においても、「立命館は、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。」と結ばれており、平和創造に向けた誓いが述べられています。

現在立命館は、4つの中高一貫校と1つの小学校を附属校として併設しており、立命館アイデンティティを持った人材を世に多数輩出しております。附属校の児童、生徒は平和学習の拠点を立命館大学国際平和ミュージアムとしており、各校とも施設見学等で訪問をし、平和学習を深める取り組みを行なっております。

2012年10月14日から12月21日の期間、第6回立命館附属校平和教育実践展示が立命館大学国際平和ミュージアムで行われました。各附属校がそれぞれ2週間の日程で、平和教育実践の様子を連続展示しました。

立命館中学校・高等学校からは、中学2年生による沖縄平和研修の様子や課題研究報告、中学3年生によるベトナムでのボランティア体験、高校の各授業における平和学習の成果をレポートや、ポスターなどで展示しました。



公民を融合した近現代史の実践による「戦後史」の学習の成果をそれぞれポスターで展示しました。

立命館宇治中学校・高等学校からは、中学1年生の地理学習の「世界の国調べ」、2年生の歴史学習から文献調査による「モノが語る歴史」、3年生の歴史・

立命館小学校からは、4年生が平和学習を通して感じたこと、考えたことを描いたポスターの展示と、併せて、立命館小学校における平和教育の取り組みを紹介しました。



や思いをポスターで展示しました。

立命館慶祥中学校・高等学校からは、中学生による平和学習の報告パネルと平和を表現する美術作品「バルサ・タワー」の展示、高校1年生による広島・長崎・平和研修報告、高校2年生による海外研修で見た未来遺産運動についての報告、高校3年生による「サイコロくん」の教材展示がありました。



このような活動を通して、附属校の児童・生徒たちは格段に平和創造に向けた意識が高まったことと確信しております。自分たちの考えや主張を世の中へ発信できたことや、多数の来館者の皆様から貴重なご意見やご感想をいただいたことなどは、確実に、児童・生徒たちの財産となっております。

また一方で、平和創造を掲げる立命館の附属校として、今後、更なる充実した平和教育展開の可能性について考えさせられる機会ともなりました。平和教育自体が、社会科での学習に留まらず、他教科での学習あるいは学校全体の取り組みへいかに拡げていけるか、いかに系統立てて教育することで平和の創造につなげていけるか、いかに日常の教育の中で正義感や倫理感を持った人材育成につなげていけるか、など再考する必要を感じました。

今回の機会で多くのことを学べたことに感謝し、更に発展した取り組みへつなげていきたいです。

第6回 川崎市平和館



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議（ロゴマーク）

川崎市平和館は、「市民の平和に対する理解を深めるとともに、平和を希求する市民相互の交流及び平和活動を推進し、平和都市の創造と恒久平和の実現に寄与することを目的に1992（平成4）年に開館しました。以来、川崎空襲や日本と戦争、核兵器など、戦争・武力紛争についてのトピックだけでなく、人権・貧困・環境など幅広い平和問題を常設展示として主に動画で展示することで、市民・見学者の、包括的な平和問題の理解促進の一助となって参りました。

これら常設展示以外にも、毎年川崎大空襲記録展や原爆展の開催、また、親子を対象としたイベントや、主に時事的なテーマを扱う企画展示も行っています。

平和をつくる小さな拠点としての川崎市平和館にご来館いただき、私たちと一緒に平和に対する理解を深めていきましょう。



川崎市平和館

常設展示

平和館では2階を常設展示コーナーとして使用しています。常設展示では、戦時下の川崎や日本と戦争、核兵器、民族紛争・テロリズムといった武力を使った紛争だけでなく、人権問題や飢餓貧困、環境問題など、平和な生活を脅かす様々な要素を取り上げています。そして、国際機関やNGOなど様々なアクターによる、これら課題に対する様々な取り組みの紹介も行っています。

これらの展示のほとんどは動画の上映という形で提示されています。日本と戦争のコーナーには、市民の方々

からの寄贈による当時の物品の展示も行っています。
※常設展示場は2013（平成25）年度に展示内容を更新する予定です。

川崎大空襲記録展

産業都市として発展してきた川崎は、戦時中多くの爆撃を受けました。殊に1945（昭和20）年4月15日の川崎大空襲は、多くの市民の命を奪いました。平和館では毎年3月～5月にかけて、川崎大空襲についての展示を川崎市公文書館の協力を得て開催しています。

原爆展・特別展

68年前の8月に、史上初めて原爆が広島・長崎で投下され、多くの人々の命を奪いました。平和館では毎年この時期に原爆を中心とした特別展示を開催しています。この特別展では、沖縄戦等関連する展示も同時に行っています。

子ども事業： 親子で来て見て考える平和推進事業

平和館では未来を担う子どもたちやその保護者の方々、教育に携わる方々が平和について考える場を提供する事を目的にして、毎月1回子ども事業を開催しています。子ども事業では、過去の戦争についてだけでなく、環境、人権、国際理解など幅広いトピックについて、講演やウォーキングツアーや体験型イベントなど幅広い試みを行っています。

企画展Plus Three

平和館では2012（平成24）年で開館から20周年を迎えるにあたり、一方通行ではない「平和を希求する市民相互の交流と平和活動の推進」という初心に立ち返った活性化策として、毎回テーマを設定し、学校・大学や市民のテーマに関連する取り組みをパネルで紹介する「企画展Plus Three」を年3回開催しています。また、出展した学生による発表と、学生と来場者との意見交換を行うイベントも開催しています。



常設展示

基本情報

- ◆住所 211-0021 川崎市中区木月住吉町33-1
- ◆電話 044-433-0171 / ファクス 044-433-0232
- ◆ホームページ
<http://www.city.kawasaki.jp/shisetsu/category/21-21-0-0-0-0-0-0-0.html>
- ◆開館時間 午前9時～午後5時（会議室利用は午後9時30分まで）
- ◆入館料 無料（会議室は有料）
- ◆休館日 月曜日、第3火曜日（祝日の場合はその直後の平日）
年末年始（12月29日～1月3日）
ただし、8月6日、9日、15日は開館しています。

ボランティアガイドに参加して思うこと

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 山崎 淳子

平和ミュージアムのガイドを初めて2年半くらい経ちました。きっかけは友人からの勧めで、2011年度のボランティア養成講座を受講して、メンバーに加えていただきました。

講座では「戦争がなければ平和と言えるのか」に対して「暴力のない状態が平和である」という、より幅の広い概念であることを学びました。そしてガイドをしながら、現状で世界に生起する諸問題を考える機会も与えられています。

教師をしていましたので、在職中にも何度かこのミュージアムへ来て、戦争の加害責任・被害の苦痛・悲しみについて学び、それらのテーマで高校生たちと語り合ったことを思い出しています。

その一つに1996年だったと思いますが、生徒会が学園祭でフランスが南太平洋で核実験をしたことを取り上げました。ピキニの灰で日本人死者を出している事を知っている生徒たちはこの実験の是非について学園祭でディベートをする計画を立てました。核実験賛成派と反対派に分かれて議論するのです。それぞれのグループに教師がつくのですが、私はその一人に選ばれてしまいました。もう一人は当時、保護者でおられた安斎育郎先生に生徒会はお願いしてきたというのです。お忙しい先生でしたがその日だけ空いておられて、来てくださる事ができたのでした。当日、先生は核実験反対の方が話しやすいでしょうと私を核実験反対派の側にして下さり、先生は核実験賛成の側に回ってくださいました。討論で会場の意向は反対派に傾き、核をなくしたいと考えていた生徒会はとても喜びました。その後、生徒会はフランスのシラク大統領に核実験に対する抗議の手紙を英訳したものと、大きなシートにみんなで寄せ書きした抗議文とを送りました。そのことについても安斎先生は高校生たちが抗議をする意味が有り、きっと返事が来るでしょうとおっしゃり、生徒たちにとっては大きな励みになりました。

父が私の就学前に中国戦線に召集されていたことと私自身も国民学校時代に戦争を経験していますので、「なぜ、アジア太平洋戦争が起こったのか。どうしてそれを防ぐことができなかったのか」ということが歴史を学びながら、常に気になっている問題です。

ガイドをする前に そうした経験がありましたので、不安を抱えながらもガイドをやらせていただこうと決

心しました。更に私がガイドをする不安を取り除くことができたのは平和ミュージアムのガイドする者にとって、三つのよりどころがあることです。

一点目はガイドのミーティングがミュージアムの休館日に月一度行われることです。ここではガイド中に問題だと思ふ事を出して、皆さんで考えていただくことができるのです。ベテランのガイドの方々からいろんなことを示唆されたり、参観者の年齢による言葉の使い方を聞かせてもらったり、参考になることが沢山あります。

二点目はミュージアムの主催や共催でいろんな写真や資料による展示がなされます。これらは、現代の世界の状況を知るうえで大いに役立ちます。戦後67年を経た昨年は、医療における戦争犯罪が取り上げられました（第75回ミニ企画展示「戦争と医の倫理～日本の医学者・医師の『15年戦争』への加担と責任」）。ドイツと日本の加害状況も含めて示されるようになっていきます。私は南京の虐殺博物館のマネキンで日本人医師が中国人捕虜へ細菌を注射する人体実験を見ましたので、そのことの全貌がわからずもう少し知りたいと考えていました。これは組織的に軍からの命令でなされたことと考えていましたが、ミュージアムでの展示ではそうでなく軍人たちが自主的にやったことや、人体実験の結果の日本軍医の持つデータは敗戦時に医師の戦争犯罪を問わないことにして、アメリカ軍が没収したということでした。そうしたことも明らかになりつつあるようです。

三点目はミュージアムに限らずそれ以外にもいろんな平和につながる催しや学習会がなされています。また、年に一度ガイドたちを中心に「安斎先生と行く平和ツアー」が行われます。昨年、初めて参加し、原発反対の「祝島」や「回天記念館」などへ行きました。今年は3月に福島の前線地へ行く計画が進行中です。現地を見ることで映像や本を読むことと違う現実が見えてくることを期待しています。

これらに参加して不備なところは少しでも補えたらいいと考えていますので、条件の許す限り、学習会には参加し断片的な知識をまとめたものにしていく努力を重ねています。

ガイドに携わるようになって、今、私のしなくてはならないことが少し明らかになったようなこの頃です。

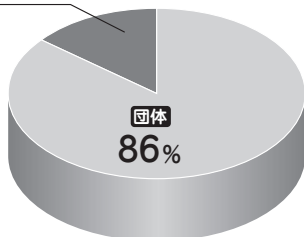
2012年4月
～2013年1月
入館者状況

◎開館日数

243日

<有料団体・個人入館者状況>

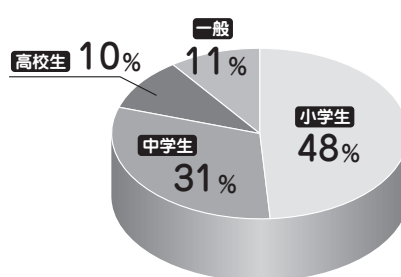
個人 14%



◎オープン後常設展入館者数累計

841,398名

<有料団体入館者数状況>



2012年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	人数計(名)
総入館者数		2,286	6,336	4,901	2,907	2,441	3,000	12,260	8,509	3,244	1,498	47,382
来館80万人	2012年5月22日 来館者80万人											
特別展	春季特別展 『放射能と人類の未来』 会期：5/15～7/27											9,691
	特別展 『世界報道写真展2012 -WORLD PRESS PHOTO 2012-』											
	京 都(立命館大学衣笠キャンパス) 会期：9/19～10/14											6,632
	滋 賀(立命館大学びわこ・くさつキャンパス) 会期：10/16～11/1											2,303
	大 分(立命館アジア太平洋大学) 会期：11/4～11/18											2,672
特別展示	秋季特別展 『未完の作品／永遠のはじまりー「無言館」 収蔵作品から芸術の原点を考える』 会期：10/23～12/1											12,489
	小 計											33,787
特別協力	華道家元池坊×立命館大学国際平和ミュージアム特別展示"平和の祈りを生ける"											
	【広島会場】(広島県民文化センター) 第58回広島平和美術展に出展 (8/2～8/7)											オープン
	【東京会場】(東京ドームシティ プリズムホール) 第20回8・15国際平和美術展に出展 (10/7～10/9)											オープン
講演会 ほか	京都・大学ミュージアム連携「大学は宝箱！～京都の大学ミュージアム収蔵品展」(京都大学総合博物館)に出展 (10/3～11/25)											－
	「写真報告3・11 赤浜」撮影 菊地公夫(国際平和ミュージアム 1階ロビー) (9/15～10/12)											オープン
講演会 ほか	立命館大学国際平和ミュージアム20周年記念式典(国際平和ミュージアム 1階ロビー) (5/19)											218
	「平和への信念ー中野信夫の足跡」展(国際平和ミュージアム 1階ロビー) (5/19～6/17)											オープン
	来館80万人記念セレモニー(奈良市立富雄第三中学校2年生 69名) (5/22)											－
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会(衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム) (6/10)											184
	安斎育郎名誉館長「放射能リテラシーのすすめ」											
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会(衣笠キャンパス 充光館301号教室) (7/14)											78
	豊田直巳氏(フォトジャーナリスト)『イラクからフクシマへー放射能汚染地帯を歩いて』											
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？2012(国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/26)											26
	下見見学会 (6日間：7/25、7/27、8/17、8/22、8/23、8/24)											38
	世界報道写真展オープニングコンサート(国際平和ミュージアム 1階ロビー) (9/19)											65
	NOUN YA (ヌン・ヤ)：フルート(ナイスサム・ジャラル)、ウード(ヤン・ピタル)のユニット											
	「世界報道写真展2012」公開記念講演会											
	恒成利幸氏(朝日新聞社)『東日本大震災～そして現在 そこから見えること、考えなければならないこと』											
	【京都会場】衣笠キャンパス 以学館4号教室 (10/9)											184
	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス エポック立命21ロビー (10/16 1日2回実施)											84
	『未完の作品／永遠のはじまりー「無言館」 収蔵作品から芸術の原点を考える』公開記念講演会											180
	鼎談『「無言館」のこと』野見山暁治氏(洋画家)×窪島誠一郎氏(「無言館」館主)×安斎育郎名誉館長											
	開設20周年記念国際平和シンポジウム「平和研究所の軌跡・課題・可能性」(創思館カンファレンスルーム) (11/30)											80
	小 計											1,137

国際平和ミュージアムでは、2013 年度も多くの特別展や行事などを企画しています。

5 月 14 日より開催予定の「ジミー・ットム・ミリキタニ回顧展」では、国家や国民という枠にとらわれず、アメリカの日系人収容所や 9.11 テロを体験し、ニュー・ヨークでホームレスとなりながらも自由な芸術活動を行なった画家の生涯と作品を展示します。

無言館の作品を展示した「未完の作品／永遠のはじまり」につづいて、絵画の展示となります。また同時期に、「原爆の図」で知られる丸木位里の母、丸木スマの作品展も開催予定です。悲惨な体験を経てもなお芸術に表現される生命のよこびこそが、平和と尊ぶ思想の根本にあるのだと思います。

国際平和ミュージアムは基本的には歴史博物館ですが、これらの芸術の展示によって、戦争と平和の問題を考えていただく機縁となれば幸いです。

また、多くの収蔵品を所蔵する歴史博物館として、戦争の記憶を未来に伝える文化的・社会的資産の保全と公開に務めてまいります。秋の特別展では、当ミュージアム所蔵の資料を中心として戦時体制中の戦意高揚政策を考える展示を企画しています。総合大学立の平和博物館として、歴史、芸術、科学、平和学、社会学、心理学など、多くの知識を結集して、大学立ミュージアムにふさわしい展示を行ないたいと思います。

これからの国際平和ミュージアムの活動にご支援をいただきますように、よろしくお願いいたします。

加國尚志

※ 本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はご遠慮ください

ミュージアムインフォメーション

特別展

「ジミー・ットム・ミリキタニ回顧展

—日系人強制収容所と9.11を体験した反骨のホームレス画家—

会 期：2013年5月14日(火)～7月20日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

監修・協力：米山裕（立命館大学文学部教授、アメリカ史・日系移民史）

協 力：ウィング・ルーク博物館（アメリカ）、原爆の図 丸木美術館、山根和代

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、朝日新聞社

京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社



Mother and Baby



World Trade Center 2

(作品は2点ともウィング・ルーク博物館蔵)

開催趣旨

映画『ミリキタニの猫』で知られるジミー・ットム・ミリキタニ（1920-2012）は、第二次世界大戦中のアメリカ合衆国でツール・レイク収容所へ送られ、強制収容を体験しました。晩年にはニューヨークでホームレスとなりながらもアーティストとして生き、路上で作品を描いて売る生活を送る時期もありました。本展では、ミリキタニ作品30点を展示し、在米日本人・日系人強制収容、故郷広島への被爆など彼がその人生の中で直面した歴史についても解説します。厳しい体験の中でもユーモアを持ち続けて描いたかわいい猫や、収容所、9.11事件などの作品を通して、歴史の傷が個人に与える深い影響やそれに立ち向かう力についても考える機会となることを願っています。

関連企画

映画 『ミリキタニの猫』 上映会

監督：リンダ・ハッテンドーフ
2006年 アメリカ

特別企画展示 「丸木スマ展—いのちをみつめて—」

会 期：2013年5月14日(火)～7月20日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階展示室内

1875年広島で生まれた丸木スマは、22歳で結婚し、家業の船宿を手伝いながら農業に従事しましたが、1945年、70歳で被爆し、夫は翌年に亡くなりました。その後長男で日本画家の丸木位里・俊夫妻（原爆の図）の勧めで絵を描き始め、自然を鋭く優いままなぞで捉えた作品を多数残し、天衣無縫の画家と呼ばれ、1956年に81歳で亡くなるまで描き続けました。今回は特別企画展として丸木スマの作品を紹介します。

日 時

6月15日(土)
12:00～14:00

会 場

立命館大学衣笠キャンパス
充光館 301号教室 (予定)

解 説

米山裕（立命館大学文学部教授）

【参加費無料・申込不要】

「世界報道写真展2013」—WORLD PRESS PHOTO 2013—

京都会場 会 期：9月18日(水)～10月13日(日)（立命館大学国際平和ミュージアム）

滋賀会場 会 期：10月15日(火)～10月31日(木)（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

大分会場 会 期：11月3日(日・祝)～11月17日(日)（立命館アジア太平洋大学）

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品（約200点）で構成した写真展で、今年で56回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたいதாகたく開催するものです。



「世界報道写真大賞」
ポール・ハンセン（スウェーデン/2012）
パレスチナ・ガザ地区で、イスラエル軍のミサイル攻撃によって死亡した兄弟が葬儀のためにモスクへと運ばれてゆく

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

第78回ミニ企画展示

●第18回京都ミュージアムロード参加企画

「京都青春時代—学生と戦争の風景—」 開催中

好評につき
会期延長!

会 期：開催中～4月7日(日)

主 催：メディア資料室 学生ミュージアムスタッフ&立命館大学国際平和ミュージアム

協 力：立命館百年史編纂室

戦時中の学生達が送った青春の日々と葛藤に現代の学生が迫ります。

第79回ミニ企画展示

●「チベットの風とともに」

会 期：2013年4月13日(土)～5月8日(水)

主 催：富樫浩之(写真家)

2010年四川省アバ滞在時に撮影した現地の写真の数々と資料を通じてチベットの状況を伝えます。

ロビー展示

●「Picture for Peace UNOY(平和の写真コンクール優秀作品展)」

会 期：2013年6月1日(土)～6月30日(日)

主 催：The United Network of Young Peacebuilders

国際的写真コンテスト「A Picture for Peace」において「何故若者が平和構築活動に重要であるのか」という問いへの答えを込めて出展された作品のうち、受賞・入賞した10点が展示されます。

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2013

2013年7月26日(金)

今年度で7度目となる企画。夏休みに親子で一緒に見て・感じて・考えて!平和について学びましょう!! 平和について、戦争について、世界で今起きていることについて、わかりやすく学び、平和について親子で考えていただく機会となりますよう、開催いたします。

教員下見見学会

2013年7月30日(火)、31日(水)、8月27日(火)、28日(水)、30日(金)

※参加状況により開催日を変更する場合があります。

夏休みに小学校・中学校の先生方を対象とした下見見学会(無料)を開催します。京都への修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和講義体験、教材キットを使った授業体験、ボランティアガイド解説つき見学、個別相談会等を行ないます。

「平和って なに色?」一字で表す平和へのメッセージ

会 期：2013年10月27日(日)～11月3日(日・祝)

2005年文字・活字文化振興法の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。



撮影：富樫浩之
([「チベットの風とともに」より])



2012年夏休み親子企画の様子

〈下見見学会プログラム〉

平和講義

ガイド付
展示見学

教材キット
授業体験

個別
相談会

第20巻第3号(通巻58号) 2013年3月8日発行



立命館大学

国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>